

Toward Better Instruction of EFL Reading Strategies:  
An Instructional Model Based on  
a Synthesis of Five Empirical Studies

-----  
A Dissertation Submitted to  
The Graduate School of Foreign Language Education and Research,  
Kansai University

-----  
In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree  
Doctor of Philosophy in Foreign Language Education and Research

-----  
By  
IKEDA, Maiko  
March 23, 2005

© Copyright by IKEDA, Maiko, 2005

## 論文要旨（概要）

本論文は、日本人大学生 EFL 学習者の読解能力向上を目指した方略訓練のあり方に関して、データに基づいた提案をおこなうために実施した五つの実証的研究の結果をまとめたものである。第一章では、最近の日本での英語教育の動向について概観したのち、本研究をおこなった理由および問題意識、つまり、なぜ「読解」能力の向上を目指した「方略」訓練が必要なのか、について述べる。

第二章では、100 を越える外国語学習方略（以下、方略）全般に関する先行研究をまとめ、今後おこなうべき研究の課題を明らかにする。まず、方略の特徴、分類、定義に関する先行研究を取り上げ、本論文で取り扱う方略の位置づけを明確にする。続いて、過去の方略研究で用いられた研究手法について、それぞれの長所と短所に言及しながら詳述し、今後の方略研究を実施する際に注意すべき点を論じる。本章後半では、方略の訓練に関する先行研究を扱う。まず、これまでに提唱されている訓練の形態について述べた後に、その有効性を検証した実証的研究を、有効性の指標別に分類する。さらに、方略訓練の教材について検討した研究をまとめる。

続く第三章では、筆者が実施した実証研究の一つ目として、読解方略訓練の効果を測定する方法の改善に関して、データをもとに考察する。具体的には、従来の研究で頻繁に用いられている質問紙に、タスクを付随させた場合とさせなかった場合、およびタスクの難易度が高い場合と低い場合では、それぞれ質問紙への回答状況がどのように異なるかを検証し、質問紙の測定精度を高める方法を模索した。研究に必要なデータの収集に際しては、EFL を学習する日本人大学生 192 名に参加を求め、次の三つの条件下で、質問紙を使って彼らの読解方略使用頻度を測定した。

- i) タスクのない場合
- ii) 難易度の高いタスクを付加した場合
- iii) 難易度の低いタスクを付加した場合

結果として、まず、調査紙の質問項目を総計した方略使用頻度の平均値を条件別に比較してみると、i) のタスクを付加しない場合には、学習者は質問紙で方略使用を過大に申告する傾向が認められた。また、質問項目を別個にみて、三つの条件における使用頻度の比較を試みた場合にも、タスクが付加されていない条件の場合に、約三分の一以上の項目で使用頻度を高く申告していることがわかった。次に、ii) と iii) の条件を用いて、付加したタスクの難易度別に質問紙の回答状況を比較したところ、約三分の一の質問項目で回答状況に差異が生じていることが確認された。この結果より、付加するタスクの難易度によっても、質問紙の回答に影響があることがわかった。以上の結果をもとに、今後の方略研究において質問紙を使用する場合には、適切な難易度のタスクを直前に学習者におこなわせ、それを参照システムとしながら、質問紙に回答させる必要があることを主張した。

第四章では、実証研究の二つ目として、方略訓練の効果がはたして定着するのかどうかを、参加者 210 名を対象として量的に検証する。方略訓練の効果を検証する指標としては、本章では方略の使用頻度を用い、約 2 ヶ月間におよぶ方略訓練の直前、直後、3 ヶ月後、そして 5 ヶ月後の四時点における参加者の方略使用頻度を検証した。分析の結果、訓練により一度上昇した方略の使用頻度は、増加率の変化こそ生じるものの、3 ヶ月および 5 ヶ月が経過した後にも持続していることが明らかとなった。この結果をもって、方略訓練の意義、および訓練効果の定着の可能性を主張した。ただし、このような方略訓練の効果は、学習者の英語能力の高さにより異なることも同時に確認された。筆者はその原因の一つとして、上位群と下位群の方略学習過程が異なっているのではないかと考察した。

第五章では、前章の研究結果を受けて、学習者の英語能力の違いにより、方略学習過程にどのような違いがあるのかを、質的手法により精査した。分

析の対象としたのは、英語能力の異なる日本人女子大学生 10 名（上位群 5 名、下位群 5 名）が 8 週間に渡り作成したポートフォリオ（方略使用に関する学習記録）であった。分析の結果、英語能力の異なる学習者の間で見られる方略学習過程に、次の六つの点で顕著な違いのあることが確認された。

- ア) ポートフォリオへの記述量
- イ) 方略を使用する目的・利点の把握
- ウ) 方略を効果的に使用する条件の把握
- エ) 方略の組み合わせ使用に対する認識
- オ) 方略使用の有効性を検証するタイミングの把握
- カ) 方略使用の有効性を検証する方法

この結果をもとに、（英語能力が低い学習者を対象とする）方略訓練においては、方略をただ単に提示するだけではなく、具体的かつ詳細な使用方法を教えることが重要であると指摘した。

第六章では、方略訓練の際に用いる教材に焦点を移し、その特徴を浮き彫りにするとともに、望まれる教材像を提示した。ここでは、まず、国内外で出版されている 52 冊の方略教授用のテキストブックを、方略研究の理論と照らし合わせながら質的に分析した。その結果、テキストブックが主に二種類に分類できることが明らかとなった。第一のタイプは、少数の認知方略を、暗示的ではあるが復習の機会を設けて導入するタイプであり、第二のタイプは、より多くの認知方略を、明示的ではあるが復習の機会をあまり設けずに導入するタイプであった。以上の結果にもとづき、本章後半では、より望ましいテキストブックを執筆する際の指針として、以下の五つを提案した。

- 1) 認知方略以外の、メタ認知方略や社会・感情方略などの指導も含むこと
- 2) 同じ方略を繰り返し提示すること
- 3) 学習者の英語能力に応じて指導方法を変化させること

- 4) 方略の組み合わせ使用について指導すること
- 5) 他の学習状況への応用の指導を含むこと

第七章は、筆者が実施した五つ目の実証研究であり、前述した四つの研究から得られた知見、つまり研究手法、教授方法、学習過程、教材に関する知見を統合した方略訓練を実施し、その効果を量的および質的に検証している。本章では、第五章の研究（学習者の方略学習過程に関する質的研究）の結果を踏まえて、方略訓練にポートフォリオの作成を加え、i) 方略を使用する条件、ii) 方略の組み合わせ使用、iii) 方略の使用後にその効果を検証する方法とタイミング、の意識化を図った。訓練は、日本人大学生 103 名に実施し、有効性を判断するための指標としては、a) 第四章の研究でも用いた方略の使用頻度の変化、b) 使用する方略の種類の変化、c) 学習者の英語読解能力の変化、さらには、d) 訓練そのものに対する学習者の態度の変容という四種類の指標を採用した。加えて、訓練終了から 5 ヶ月目までの追跡調査も実施することにより、定着度の観点からも訓練の効果を測定した。分析結果として、方略訓練におけるポートフォリオ作成の効果は、訓練に対する学習者の態度変容と、(訓練終了後)一定期間を経過したのちに見られる方略使用頻度の上昇という二点で確認された。同時に、ポートフォリオの作成を訓練に含まなくとも、方略訓練自体が、読解能力の向上、方略使用頻度の上昇およびその定着、そして使用する方略の種類を増加という複数の指標で有効であることもわかった。ただし、このような訓練の効果は、第四章で報告した研究結果と同様に、英語能力の比較的低い学習者では確認できなかった。そこで、英語能力が低いグループの学習者たちのポートフォリオを分析したところ、彼らの方略使用の方法が、読解過程の促進に寄与するようなものではないことが確認された。これは、第五章のポートフォリオ分析の結果を追証するものといえよう。以上のような結果をもって、本章の最後では、今後の教育的示唆として、方略の適切な使い方を細かく指導していくことの重要性や、ポートフォリオの有効活用について言及している。

最後に、第八章では、第二章から第七章までの五つの研究に共通した問題点や限界点を指摘したのちに、各研究より得られた結果をまとめ、今後の方略研究の方向性を示す。そして結論として、五つの実証的研究の結果に基づき、1) 診断、2) 提示、3) 練習、4) 評価の四つのステップからなる方略訓練のモデルを提示する。

なお、本論文末には、先行研究の一覧と、実証研究で利用した質問紙、教材、テストなどを付録として添付した。